

トの場合のように刺激条件だけでなく、強化スケジュールによる変動もあり得ると示唆された。今回はこの2点について検討し、併せて同一装置によってヒトの閾値を測定した。

ニホンザルの雄2頭を被験体とし、防音キュービクル内のゲージの観察窓から等速円運動をする運動と静止の2刺激を両眼で観察し同時弁別学習させた。刺激は各々直径4cmの円周上に4光点を90°間隔に配置し、刺激面の輝度は1.3~1.4 cd/m<sup>2</sup>(NITS), 観察距離は30cm一定である。実験の制御はPOP-8を使い、刺激呈示はself-start methodとした。運動刺激のパネルを押した場合にのみ強化した。呈示時間は10秒で、これを過ぎるか、誤反応時はTime Out 5秒。強化数は100, 1セッション60分を上限とした。正答率75%を基準とした日毎の上下法によって閾値を測定した。

閾値は光点の回転角で平均40分/秒、毎秒移動視角にして、約2.67分で前回より減少した。ヒト5名の平均閾値が2.0分であったことと比較すると、ニホンザルの閾値がヒトのそれとほぼ同程度であり、感性過程の限界がこの周辺にあると考えられる。CRFによる測定後、強化スケジュールが閾値に及ぼす影響をみるため、FRを導入したが、見本合せ実験等で現われる正答率の上昇、すなわち閾値の減少はなかった。その閾値は1頭はCRFと同程度であったが、他の1頭は弁別行動を維持しなかった。また、反応時間は刺激の運動速度の減少につれて増加したが、光点の移動距離だけが単なる弁別の手掛りとはなっていないことが明らかになった。

### 霊長類の和名について

小原秀雄(女子栄養大・栄養)

和名は、動植物の種、亜種などの日本語の名称である。和名には命名規約はない。

和名はきわめてまちまちであるが、その和名の付け方にはその著者の基本的理念が表明されている。その基本的理念とは、分類系統についての見方であると共に、日本の生物教育(広義)への考え方を表明している。

一方、図鑑などでは国際的な種が記載されるようになっており(例・世界のサル)、和名は前につけられたものと異なるものが新しく付けられた

りしているが、その際、前の和名は十分に参考にされない傾向がある。しかしまた、チンパンジーを黒猩猩と呼んだように、時代的な変化があるので、必ずしも前につけられたものが尊重できない。

生物学校教科書には、和名が使われている。そのような和名には、国民教育との関わりが相当に深い。霊長類学の権威は、しだいに認められてくるので、影響はいっそう著しい。

和名の法則化の基礎を考えるには鳥学会の事例を含め、それなりに会合を持ってささねばならない。和名の法則の確定は、以上のようなことから、さらに分類系統の変化があったとき補正することまで含めて、和名を決めねばならない。

和名は普及を考えねばならないところもあるが、それは動物園との協力などでなされるものである。

今回は、問題の所在と会合の必要といった推進の方法を知ること で終わった。なお、これは哺乳類の和名とも共通するものである。

## 3. 研 究 会

### 霊長類の適応に関する研究会

#### I サーカディアン・リズム

1. 期日 昭和53年10月29日
2. 場所 京都大学霊長類研究所会議室
3. 参加者数 約50名
4. プログラム
  - 1) ニ・三の哺乳類行動のパターン  
安藤 滋(愛知県立大)
  - 2) 野生ニホンザルの日周期活動  
長谷川寿一(東大・文・人文科学)
  - 3) サルの日周期行動と光・温度  
登倉 尋実(奈良女子大・家政・被服生理)
  - 4) 内因性リズムの同調について  
広重 力(北大・医・生理)
  - 5) サーカディアン・リズムと体温調節反応  
中山 昭雄(阪大・医・生理)
  - 6) 動物のサーカディアン・リズムに関する概説  
桑原万寿太郎(基生研)